

「トム・ソーヤの陰謀」におけるプロヴィデンス

朝日 由紀子

マーク・トウェイン文学研究において興味ある焦点と思われるのは、すでに批評史上評価の確立した作品を対象とするだけでなく、未完とされる作品を取り上げ、その創作意図がどうして完結にいたらなかったか考察する点にもある。本論では、『ハックルベリー・フィンの冒険』の続編というべき作品、「トム・ソーヤの陰謀」に注目したい。この作品は、『ハックルベリー・フィンの冒険』と同様、ハックルベリー・フィンを語り手とし、3万語を超える分量と全10章から構成され、あと一歩で完結すると予想できるほど完成度が高いにもかかわらず、マーク・トウェインは、10章で中斷しペンを置いた。1900年10月、9年に及ぶヨーロッパ生活を終え、マーク・トウェインはアメリカに帰国するが、「トム・ソーヤの陰謀」の執筆は、その間、1897年スイスで開始され、一時休筆したものの、1898年から1900年にかけて続けられた。それまでの作品のモチーフと明らかに共通する特徴を有しながら、なお特筆に値するテーマがこの作品には見られる。それは、「プロヴィデンス (Providence)」というキー概念である。その概念の解釈をめぐる時代状況を考慮に入れつつ、作品を分析し、未完となった所以を考察していきたい。

I.

高名な批評家ライオネル・トリリングのすぐれた論考「ハックルベリー・

フィンの偉大さ」にならって言えば、作家マーク・トウェインの偉大さの証となる作品『ハックルベリー・フィンの冒険』は、1884年にまざイギリスで、さらに続けてアメリカで出版された。語り手のハックルベリー・フィンは、逃亡奴隷のジムとの苦楽をともにした旅を終え、帰還したとき、読者に向かって別れの挨拶を告げる。「本をつくることはなんと面倒なことかわかっていたら、取りかかることはしなかったし、もうこれからするつもりはない。」と語った後、“But I reckon I got to light out for the Territory ahead of the rest, because Aunt Sally she’s going to adopt me and sivilize me, and I can’t stand it. I been there before.”と結ぶ。この一文には、批評家の注目を引く言葉が二つあり、それらは関連した内容となっている。一つは、ハックルベリー・フィン論のキーワードとして有名な“sivilize”である。もちろんこの言葉は、ハックのミススペルで、「文明化する」あるいは「教化する」という意味となろう。そしてもうひとつが、“light out for the Territory”である。ここでいう“the Territory”がどこをさすかは、この作品の時代設定から、Indian Territoryであることが推測される。マーク・トウェインの生地ミズリー州（1821年連邦加入）の南に隣接するアーカンソー州（1836年連邦加入）の西隣は、Indian Territoryであった。ハックは、作品の冒頭、ダグラス未亡人が自分を息子として引き取り教化することになったが、それには我慢ができないと語り始める。そして、こんどはサリーおばさんがハックを養子にして教化するつもりなので、急いでインディアン居住地に逃れるためここを去っていくと語り終える。こうして、作品を通して変わらぬハックルベリー・フィンの浮浪児であり野性児そのままの姿が、読者の忘れがたい心象となったといえよう。

「トム・ソーヤの陰謀」の1章は、『ハックルベリー・フィンの冒険』の1章の世界にハックが戻ったところから始まる。カーディフ・ヒルに住むダグラス未亡人のもとで再び「教化される」ことになったハックが語って

いく。そして、『ハックルベリー・フィンの冒険』の最終章で自由黒人となったジムは、いずれ妻子を買い戻すことができるよう、ダグラス未亡人に雇われ、賃金を得る身になっていることも紹介される。『ハックルベリー・フィンの冒険』の33章で初めて登場し、ジムを自由黒人にする筋書を作り出すトム・ソーヤは、ここでは最初から登場し、ハックとジムに「何かすべきことを計画する」ことをもちかける。そのやりとりの場面で、「プロヴィデンス」がわずか1ページのなかで8回使われており、トムとジムの話題の核心が、「神の計画」と「トムの計画」との対比にあることが浮き彫りにされる。

ハックとジムは、トムとまったく違って、「あたまを疲れさせ、なんの役にも立たない計画などしたことはなく、・・・物事は偶然に起こる通りに任せる」方が気楽だと口にする。それに対して、トムは、「それは、怠惰なやり方であり」、プロヴィデンスに働きかけて役立たせよう、と言い切る。ジムは、「そのようなことを言うのは、罪深いことで、口にすべきではない」と言い、プロヴィデンスに対して人がなにか口をはさむことはできない、と説く。このようにトムとの対話で明らかになってくることは、前作のとき逃亡奴隷であったジムとは異なる自由黒人としての発言が、この作品では大きな比重を占めているという点である。ハックは、さらに続くプロヴィデンス論争を語るなかで、ジムに共感を示している。トムは、自分の計画が反対される危険を冒したことを悟って、ジムに方向を変えて質問をする。「プロヴィデンスは、あらかじめすべてのことを定めているだろう？」「始めより世の終わりまで、まったくその通りだ。」というジムの全面的肯定を踏まえて、トムは、計画しているのは自分だと考えているとしても、それは、「神の計画」であることを意味しているのではないか、そうであれば、神の計画がまさに何であるかを見出すまで自分が計画し続けることは正しいのではないか、と論理的な詭弁を使う。ジムは、プロヴィ

デンスが満足しない計画を、先に立って無理に進めるのが罪であるから、トムのいう計画は罪ではない、という結論を得て納得する。

そこでトムが提案した最初の計画は、“a civil war”を起こすことであった。ここでは、普通名詞の「内戦」の意味と取れるが、読者はトムの計画の意外性に驚くと同時に、アメリカ史上最大の内戦である南北戦争“the Civil War”を想起するであろう。その言葉を聞いて考えたジムは、“civil”とはどういう意味か問う。トムは、一瞬答えにつまるが、「その意味は、善い、親切な、礼儀正しいということで、言ってみればクリスチャンということ」と解説する。ジムは、戦争では人は戦い、殺し合いをするのではないかと問い返し、トムが「もちろん」と言ったことで、即座にジムは、トムの言った意味での戦争などありえないし、プロヴィデンスはトムが“a civil war”を起こすことを許さない、と反対する。歴史書を見れば、昔から数多くの「内戦」があったし、そのことを、プロヴィデンスは耳にしている、と歴史知識の豊富なトムは説明するが、ジムは、そのようなことを言うのは罪であって、これからプロヴィデンスがお許しになるとは信じられず、心配のあまりトムにその計画を止めるよう乞う。結果、大きな規模の内戦を起こす計画を準備してきたトムであるが、黒人の願いを聞き入れて自分の計画を諦めたことを、ハックは、気高い行為であると語る。

この箇所注目すべきは、つぎにハックが、南北戦争を具体的に指してはいないものの、南北戦争に関するトムの歴史的な功績が認識されていない点を残念がっていることである。ハリエット・ピーチャー・ストウを筆頭に他の者たちが、「その戦争を引き起こしたという名声を得ていることは正当でも公平でもないように思う。」彼らが思いつく何年も前に、トムが最初に考え出したのであって、ジムがあの時いなかったならば、トムは先んじて戦争を起こし、榮譽を受けていたことだろう、とハックは回想しているのである。ハリエット・ピーチャー・ストウ（1811年－1896年）は、

『アンクル・トムの小屋』を1851年に出版し、北部、とくに奴隷制廃止論者の間に大きな反響を呼び、ひいては南北戦争に突入する契機を作った作家として知られている。また、エイブラハム・リンカーン大統領が、1862年ストウ夫人に会見したとき、「あなたのような小さい方が、この大きな戦争を引き起こしたのですね。」と語ったというエピソードは、あまりにも有名である。このような歴史的事実に照らすと、ハックが語っている「現在」は、南北戦争後であると推定される。また、作品の時代設定は、とくに2章以下で語られている内容から、奴隷制をめぐる南北の対立が熾烈化している時期におかれているといえる。こうしたことから、「トム・ソーヤの陰謀」の作品には、南北戦争前後の時代状況が描きこまれていると見てよいであろう。トムは、『トム・ソーヤの冒険』では、物語の空想世界に憧れ、海賊やロビンフッドごっこを楽しむ少年であった。だが、この作品では、歴史的転換を引き起こすような「なにかを計画する」ことに一所懸命になるそれまでに見られないトム像が、ハックの目で語られていることは興味深い。そして1章から明らかなように、トムは、歴史とプロヴィデンスとの関係に関心を持ち、作品を通じて、ジムやハックとの対話のなかでプロヴィデンス観を吐露しているのである。

II.

ここで、作品におけるプロヴィデンスの用法を見ていく前に、時代状況のなかで、どのようにプロヴィデンスが奴隷制をめぐる論争のキーとなる概念であったかを知っておきたい。とりわけ、奴隷制を死守したい南部側の論拠と論法をおもに取り上げていくことになる。

奴隷制支持者として、南部の聖職者たちの多くは、歴史はプロヴィデンスによって導かれているという見解に立っていた。まず聖書に奴隷制の始まりが示されており、それは「創世記」9:20-27のノアとハムの記述にその

根拠があるとした。『新共同訳聖書』によれば、つぎのように記されている。「ノアは、末の息子ハム（カナン之父）に対して『カナンは呪われよ 奴隷の奴隷となり、兄たちに仕えよ。』また言った。『セムの神、主をたたえよ。カナンはセムの奴隷となれ。神がヤフェトの土地を広げ セムの天幕に住ませ カナンはその奴隷となれ。』」南部の擁護者たちは、ヨーロッパ人はヤフェトの子孫であり、アジア人（ネイティブアメリカ人）はセムの子孫、アフリカ人はハムの子孫である、とそれぞれの人種的アイデンティティを信じ、南北戦争前の論調では、アメリカの奴隷制の正当性と起源を説明するものとして、ハムの呪いの物語を引くことが一般であった。アメリカが二つの国家に分裂することになったとき、南部連合の大統領に就任するジェファーソン・デイヴィスも、1848年、連邦上院において南部奴隷制を正当化するためのスピーチで、「神に見放されたノアの息子にかけられた呪い」という言葉を用いた、という実例が挙げられよう。

奴隷制の起源を聖書に求めることによって、アメリカは、プロヴィデンスによって歴史的使命が与えられている、という主張にもつながった。南北戦争勃発前の時期、奴隷制支持のトラクトによって影響力をもっていた、ジョージア州サバンナの牧師ジョセフ・スタイルズのプロヴィデンス観に触れておこう。奴隷制の目的は何かと問い、アフリカ人は、アメリカで知識とキリスト教を学び、やがて文明の恩恵をアフリカに伝播することになるというご計画を神はもっておられることによる、と説くのである。スタイルズに見られるこの典型的な白人文明優位主義は、19世紀後半の欧米帝国主義に共通する考え方といえるであろう。

エイブラハム・リンカーンが大統領選に勝利した1860年11月、牧師ベンジャミン・パーマーは、ニューオーリンズの第一長老派教会において大会衆を前に、連邦脱退は正しい進路であると説いた。パーマーの論法を見ることにより、この危機的状況における南部特有のプロヴィデンス観を知る

ことができる。パーマーは、神が連邦脱退を是認されるかどうかの重要な問題を解くために、奴隷制は、神から南部に伝達された「神聖なる委託」であるという点に力点を置いた。そして、北部の奴隷制廃止論者を槍玉にあげ、フランス革命の最悪な過激さに影響をうけた見せかけの改革要求と、すべての悪は正されるという神を恐れない考えとにより、これまで制度に挑戦してきたと非難した。南部の使命は、現存する奴隷制を永続させていくことであり、連邦脱退は、神が南部人に与えた任務を遂行していくことのできる唯一の方法であると断言したのである。

連邦脱退と南北戦争へとむかっていく歴史の動きのなかで、奴隷制反対側も奴隷制賛成側も双方、アメリカ合衆国の分裂に合わせたプロヴィデンスによる解釈をしてきたといえよう。奴隷制反対側にとっては、それは、連邦を破壊するか、あるいは南部を荒廃させることになる神罰としてのプロヴィデンスを意味し、また、奴隷制賛成派勢力を容認してきたことによる墮落した歴史を擲つことを意味した。奴隷制という国家的罪を拭い去れないままにきた歴史に対する神の怒りから逃れることはできない、と奴隷制廃止論者は予告してきたのである。一方、奴隷制賛成側にとっては、すでに見たように、神は奴隷制を保持していく使命を南部に任せられてきたが、この制度の目的と見通しに関する不可解な霧が最終的には晴れることになるという、歴史のなかで明かされるプロヴィデンスを意味していたといえよう。ただいづれにしても、ピューリタンの「丘の上の町」建設の歴史に始まり、アメリカ独立革命、そして、南北戦争にいたって、アメリカの歴史に人知を超えたプロヴィデンスを読み取ろうとする努力は最高潮に達したといえるであろう。

Ⅲ.

トムは、「内戦」計画を断念した後、「革命」がつぎの計画であることを

打ち明ける。フランス革命やクロムウェルのイギリス革命を念頭においてのことである。だが、ジムは、昨年の夏ミシシッピ川での旅で出会った「王様」ひとりでもうたくさんだと言い始める。『ハックルベリー・フィンの冒険』の25章から28章で語られた、メアリ・ジェーンとみつくちの娘が受け継いだ遺産を横取りしようとした「王様」の卑劣さを読者も思い出すことになるが、ジムはあのような王様とは二度と関わりたくないといい、トムの計画に反対する。「革命」を諦めたトムは、つぎに「反乱」を持ち出すが、その目的がはっきりしないことから、「陰謀」が考え出され、ついにトムの計画は、「陰謀」を企てることに決まる。

トムが考えた陰謀の目的は、奴隷制廃止論者について人びとの不安をかきたてることであった。その頃ちょうど2週間以上もイリノイ側の森にいるという見知らぬ者たちの噂が不安を呼んでいたからである。姿が消えたかと思うと、また姿を現し、だれもかれも、何人かの黒人たちを自由にするため逃亡させる機会をねらっている奴隷制廃止論者たちだと憶測した。町中が緊張感に包まれており、誰かのそばにそっと近づいて「奴隷制廃止論者」という言葉をやっただけで、ドキッとして冷や汗が出るのがわかるといった有様であった。奴隷が逃走するのを幫助する「奴隷制廃止論者」に対する町の人々の切迫した恐怖が、トムの陰謀の動因となったのである。陰謀は、町が厳戒態勢に入っているこの時期にはぴったりといえた。

トムは、ハックとジムに自分の計画を明かす。目的を達成するためのトムの筋書を、ここで確認しておく必要がある。なぜなら、その原案が、以降どのように進行していったかが、作品の主要なプロットを構成しているからである。第一に、逃亡させる黒人を一人見つけることから始めるが、いまの状況では恐ろしくて逃亡しようとする黒人などいないので、トムは、自分にその黒人の役をふりあてる。顔や手などを黒く塗り、逃亡奴隷となって幽霊屋敷に隠れ、ハックがその奴隷を見つけて、奴隷取引を商売と

するブラディッシュに売り渡した後、逃亡させるという筋書である。ハックは、ブラディッシュについて町で一番卑劣な男と説明を加える。そのトムの計画に、ジムは、教会員なので宗教に従っていないことは認められない、と異議申し立てをする。南部では、奴隷の所有主は、自分の奴隷を売ることを認められているが、トムの扮する奴隷はハックの所有物ではないのに、それを売るとは詐欺ではないかと、ジムは恐れたのである。トムは、少しでも疑いがあるか、モラルに反することがあるようなら、計画からその部分はずすとす。そして、計画の第二段階の一部を変更して、ビラを作り報奨金を出すようにして、ハックは、奴隷を売のではなく、ブラディッシュに引き渡し報奨金の一部を受け取るということに改める。そして、第三段階として、ブラディッシュの手から、その奴隷を逃亡させ、その結果、逃亡の手引きをしたと思われる奴隷制廃止論者たちの存在が、人びとの心を動揺させることになることを狙った。

陰謀計画が起動する3章では、トムの改変した筋書に従って、準備が進められていく。まず、トムは、「報奨金百ドル。耳が聞こえず、口もきけない黒人少年が逃亡。アーカンソー州ローン・パイン サイモン・ハーケネスに送還されたし。」という架空のビラを作る。つぎには、用意する品々を運ぶおおきな籠が必要となり、ポリーおばさんの籠が最適であった。おばさんは、その籠を大切にしていた貸してくれそうにもなく、ちょうど黒人が持ち込んだナマズの値踏みをしていた間に、トムとハックは、籠を取って用具一式を入れ、一時間近く出かけるのを待たなければならなかった。おばさんが、籠の行方について、ナマズを売った黒人に疑いをかけ、探しに出ていったため、ようやくふたりは出かけられた。その時、トムは、「神の御手」が働いたことははっきりしていると認めた、とハックは語り、またハックもその通りだと思う。ただし、ふたりにとってそうであっても、あの黒人も「御手」に与っているのかわからないハックに、トムは、「待っ

ていれば、あの黒人が、ある不思議な計り知れないやり方で世話を受け、無視されていないことが、ハックにはわかるだろう。」という。ハックらしい思いやりが示されていると同時に、トムのプロヴィデンス観が明白に表れている場面である。そして、トムの言った通りになったことをハックは後で知る。ポリーおばさんは、あの黒人をくまなく探して籠を取っていったのではないことが判明したとき、謝罪してナマズをもうひとつ買ったのである。トムの使った「計り知れない」(inscrutable) やり方という言葉は、同じ3章でプロヴィデンスとの関連で2度用いられている。進行している計画について弟のシッドに気づかれないよう家にもどったとき、ハックが「いかに計り知れないやり方で自分たちが世話を受けているか、そして、いかにこれまでのところ、プロヴィデンスは、陰謀に満足しているという多くのしるしがあるか・・・」と語る場面においてである。その後すぐの場面でも、4週間、「陰謀は、水上をすべるように動き、波立たない水面の上において安全だろう」とトムは希望をもっているが、それには、シッドを家から離す必要があり、そのための方法をハックに伝える。トムがはしかに雇えば、シッドは遠くにいるおじさんの所に送られるはずだからである。ハックは心配するが、トムは、はしかに雇っても、大人か赤ん坊以外は死なない、といい、実行に移す方法を計画する。一度シッドに告げ口されそうになるが、その場を切り抜けた後、トムは、「陰謀は、計り知れないやり方で、注意深く見守られ、世話を受けていること」がわかり、「もっと謙虚になり、もっと感謝することを決意」する。それから、はしかに雇って部屋に閉じこもって寝ている少年のベッドにもぐりこみに出かけていく。その後1、2日して、トムは病気になるが、それははしかではなく、猩紅熱という医者診断であった。2週間の内に病状はどんどん悪化していくが、猩紅熱に雇ったことのあるハックの判断で、水を思い切り飲ませた結果、トムは回復に向かい始めて、4章に入る。

4章では、猩紅熱に罹りながら回復したトムが、さらにプロヴィデンスに対する感謝を表明している点を見てみよう。「やっと危ないところを逃れることができ、プロヴィデンスに感謝すべきだ。」と語る。トムは、はしかについて本当はほとんど知らなかったことがわかったのである。そして猩紅熱に罹ったことにより、シッドは6週間も家に帰ることができなかった。「この陰謀は、ぼくたちよりもずっと賢明な知恵によって進められている。ハック、君が疑い深くなったり、心配になったりしたときはいつでも、恐れなくて、猩紅熱のことを思い出し、来たるべき所からもっと多くの助けが得られると思出すのだ。信仰以外に望むものはない。そうすれば、すべてのことは、自分自身でできるよりも、正しく、より良く行われていく。」とハックに語るが、トムは、自分の心に言い聞かせていたと思われる。

その後トムは、奴隷制廃止論者たちと思われている「自由の息子たち」という組織の名を使い、それらしいビラを作り、印刷することに専念していく。そしてそのビラを郵便局に貼り出したときは、ポリーおばさんがひどく動揺していることに気づく。ほとんどの人が、奴隷制廃止論者たちが町を焼き払い、奴隷たちを逃がすつもりであると思ひ、半ば気が狂ったように興奮しているのを知って、家族の安全が心配になったからである。実際に街に出てみて、奴隷制廃止論者たちの挑戦状と思わせるビラが、絶大な効果を生んだことがわかる。

トムは、いよいよ機が熟したので、さっそく逃亡奴隷の少年の報奨金つきのビラを夜間に張り、計画した筋書通り実行することにして、手筈を整えた。トムは、幽霊屋敷に行き、黒人の変装をし、一方ハックは、ブラディッシュの所に行き、ブラディッシュが受け取る報奨金の一部をくれるなら、ビラの黒人の居所に案内するともちかける。そして、ハックは、鎖で縛られたトムをブラディッシュに引き渡す。トムは、夜の間にもうひとつの鍵

で鎖をはずし逃げて、幽霊屋敷に戻り、服を着替える。ジムは、真夜中に木の上で角笛を吹いて、町中を混乱に陥れる。つぎの朝ブラディッシュが町に来て、自分の黒人が逃げたといえば、だれもが、間違いなく奴隷制廃止論者たちがそれに関わっていると確信し、いっそうひどく興奮し、陰謀はこの上ない成功をおさめるであろう。

この筋書は、最初の奴隷取引の段階で挫折する。実際にハックがブラディッシュに会いに行った時、まったく予想外の反応が返ってきたのである。逃亡奴隷を捕獲するチャンスに飛びつくどころか、たった30分前に逃亡奴隷を手に入れ、こんな不穏な時に一度に二人は扱えないという。その逃亡奴隷は、500ドルの報奨金がかけていて、その奴隷を見つけた男に200ドル払ったが、300ドルの儲けだと話して、保安官に会いに出かけた。その悪い知らせは、トムをひどく悲しませた。ハックは、心の中で「プロヴィデンスが陰謀から引いていくように」思ったことを、口に出してしまう。トムは、「信頼」に欠けるハックに食ってかかり、ハックを責めてから、「このことが、陰謀全体と関係をもつ最も不可思議で計り知れない動きではないと、どうやってわかるのか」と言い、トムのプロヴィデンスへの信頼が揺るぎないものであると思わせる。

なによりもトムは、その黒人を見ることが先決だといって、その場所に行き、隙間から見ると、いかにも1000ドルの価値のある男で、地面に鎖につながれたまま大の字になって軀をかいていた。トムは、じっくりその黒人を調べるために中に入っていった。トムは、古くていたんだ靴を取り上げ、探偵のようにあちこちひっくり返して調べ、靴の片方から落ちたものも拾い上げ、そこで驚くべき証拠を見つけ、ハックに報告したのである。その奴隷は、「ホワイト・ニガー」であり、トムの書いた筋書通りに、じつは別の人間が実行したということで、「プロヴィデンスは、人を除いては、そのプログラムのなかのどの点も変えなかったということだ。君はこれか

ら先、信頼の気持ちをもっていくだらう。」ハックが、「それにしても、もっとも不思議なことが起こった」と言いかけると、「君に話したように、それは、陰謀全体のなかでもっとも不可思議で計り知れない意図（design）なのだ」とおごそかに言うトムに、単なる偶然とはおよそ言いがたいミステリアスな出来事の謎に心打たれている様子が読み取れる。

だが、つぎの6章において、トムの計画にはまったくなかった「殺人事件」が発生する。その日、町は、「最後の審判の日」の様相を呈していた。トムとハックは、夜明け前、逃亡した黒人の足跡やほかの手がかりを得るためにブラディッシュの所に行ったが、そこで発見したのは、血まみれの死体であった。奴隷商人だったブラディッシュが殺害されたことは、誰かがその当事者でなければならないとしたら、むしろ陰謀に気高い精神の高揚を与える、とトムは解釈する。このようなことを考えているトムのもとに、一本足の黒人がひどく興奮し、息を切らせながら、ジムからの伝言をもってやってきた。ジムが、ブラディッシュ殺害の咎で留置場に入れられ、トムとハックに早く来てほしいというのであった。それを聞いたトムは、「そんなことはとても考え付かなかった。それはもう、最高に素晴らしい意図だ。」と高ぶった様子でいう。そのようなトムに対して、ハックは、素晴らしいどころか、その言葉に怒り、悲しみ、ほとんど泣き叫び、「ジムは、一番の親友、一番いい心もち、いままで一番中身が真っ白な人間なのに、今犯してもない殺人で絞首刑になるなんて・・・」という。トムは、「こんなどうしようもないバカは見たことはない—いつもプロヴィデンスがすることすべてをのしるのだ。・・・だれがこの陰謀を動かしているのだ？・・・だれがジムを絞首刑になるのを許すのだ？」と、トムは激しい剣幕でハックの悲嘆を蹴散らす。

トムのプロヴィデンス観の行き着くところ、トムはジムの絞首刑の判決を決定的にするため、ジムに「殺人の動機」を問い詰めていき、ブラディッ

シュとのつながりを探っていく。ジムにはまったく思い当たらなかったが、ミス・ワトソンがジムを川下に売ろうとした時、ジムがその話を耳にして、逃亡し、ハックと筏でアーカンソーまで漂流したことをトムは思い出させる。ミス・ワトソンにジムを売るよう説得したのは、ブラディッシュであったということもわかり、トムは満足する。これで第一級殺人罪は確定するからである。

殺人事件にだれもが怒り、ジムは、「自由の息子たち」に協力し、奴隷商人を殺害し金を受け取ったと信じて疑わなかった。ハックは、「去年ジムは自由黒人になった、そのことが誰にでもジムに対して悪感情をもたせ、言うまでもなく、ジムのいい性格のことを全部忘れさせたのだ。」と語る。自由黒人の存在は、黒人と奴隷が同義語であると信じている者にとって、絶え間ない脅威を与えるものと映り、また、自由黒人が逃亡奴隷の潜在的な誘因となる恐れもあり、嫌悪される対象であったといつてよい。ハックは、さらに続けて「きのうは、誰でもその奴隷商人を軽蔑していたので、よく言う者はいなかったのに、今日は、かれを失ったことから立ち直れないように見える。」と語る。そのような空気のなかで、当然、人びとは、ジムをリンチにすると興奮して叫んでいるのだが、トムは、真犯人を見つけ死刑判決を大逆転して、ジムをヒーローに仕立てるという自分の計画を立てていた。ハックは、トムの計画はあまりにもリスクがあり、なにか計画の障害となることが起きるのではないかと恐れていたが、トムの必死の犯人捜しはことごとく失敗に終わる。絶望的な精神状態のなかにいるトムは、もはやプロヴィデンスを口にするのではなく、むしろ「運は、ぼくたちに敵対しているのだ。」というのみである。この7章だけは、一度もプロヴィデンスは言及されていない。

トムとハックが、乗船して犯人の追跡を続けているさなか、ハックは、「王様」と「公爵」に出くわす。ジムの居所を知りたがるふたりに、ジムは殺

人罪で留置されていることを知らせ、ふたりの執拗な追及をかわそうとしたが、「公爵」は、「ジムを南に売るのがいいか、それとも絞首刑がいいか」という狡猾な質問をハックに突き付けてくる。この質問を言い換えると、逃亡奴隷としてジムをミシシッピ州やアーカンソー州などの奴隷州に売るか、あるいは自由黒人として裁判で絞首刑の判決を受けるのがいいか、ということになる。それは、ブキャナン大統領就任直後の1857年3月6日、連邦最高裁に黒人奴隷スコットが、自由州イリノイ、ミネソタ準州（ミズリー協定により奴隷制禁止）に住んだことにより、自由の身になったとして、提訴した「ドレッド・スコット判決」を見ればわかる。「黒人奴隷ならびにその子孫は所有者の財産であって合衆国の市民ではない。劣等人種であるかれらは白人と同等の権利はない。」として、裁判を受ける権利を認めなかった。

ジムの運命に関するふたつの究極の選択肢が出された8章以下では、「公爵」が筋書を作っていく動因となる。それにより、「トムの陰謀」は、相対的に後退していくのである。「公爵」は、「ケンタッキー州知事からミズリー州知事にあてた逃亡犯罪人の引き渡し証明書をもっている。」といった後で、「それはインチキだが、印章と用紙は本物で、ジムを見つけ次第どここの場所でも捕獲することができ、それを阻止することのできる者はいない。」とハックに説明するが、それは1850年の逃亡奴隷法を悪用したものと見えよう。この法は、1793年の逃亡奴隷法を一段と厳しくしたもので、全米どこであれ、捕獲した逃亡奴隷を所有者に送還することを義務付けた。逃亡奴隷の捕獲者が、逃げてきた州あるいは準州に逃亡奴隷を送還する際、連邦長官が「逃亡犯罪人引き渡し証明書」を発行する権限を認めた。そして、逃亡者を助ける者は誰でも6か月の投獄と二千ドルの損害賠償および罰金の支払いの命令に従うものとされた。さらに、「公爵」は、ジムを死刑から救い出す計画を、つぎのように説明する。セントルイスの友人のと

ころに行って、ジムを逃亡奴隷から南部プランターの殺害者に変更する書類を作成し、それを見せて、ジムを南に連れていき、売ることにする。ミシシッピ川河口まで下れば、ミズリー州は、ごまかされたことがわかって、追跡できない。ジムの死刑判決が確定していると思われる状況では、この公爵の筋書に従う以外方法はないことを、ハックもトムも痛感している。しかしながら、トムは、「王様」と「公爵」がジム救出に現れるまで、真犯人の追跡を続けるといい、トムの探偵気質がここでも発揮されている。この作品の前作は、まさに『探偵トム・ソーヤ』であり、1896年8月号と9月号に『ハーパーズ・マガジン』に発表された。それは、殺人事件に関する裁判において、トムが、探偵的観察眼と推理力によって事件の謎を見事に解き明かす場面が劇的なクライマックスとなる作品である。

「トムの陰謀」の10章は、マーク・トウェインのそれまでの探偵小説、『間抜けウィルソン』（1894年）や『探偵トム・ソーヤ』と同様、読者が期待する裁判での殺人事件の審理が中心である。トムとハックは、証人として出廷する。これまでの作品における裁判と異なるのは、自由黒人ジムの裁判という点である。トムは、陰謀計画として逃亡奴隷に変装した理由、ブラディッシュの所にいた逃亡奴隷を夜中調べたとき、じつは黒人ではなかったこと、そして靴から鍵を見つけ、逃亡したと思い、追跡したことなど、ありのままに証言する。さらにハックとふたりで死体となっていたブラディッシュを発見したこと、足跡をたどって幽霊屋敷に行ったとき、犯人たちが話しているのを耳にしたが、姿は見なかったと話す、その詳しい内容について尋問される。判事から、どうしてすぐに保安官に報告しなかったかを問われ、栄光を求めるがゆえに、あまりにも重大な結果を生んでしまったトムは、その質問に答えることができない。自分の陰謀が原因でジムが殺人罪の犯人とされた上に、ジムの犯行動機まで作り上げたことなど、一連の自分が取った行動の理由を、トムが説明できないところにこの

作品が未完となった所以はあるのであろうか。探偵小説であれば、起こった事件を推理により解明し、犯人あるいは真犯人を特定することで結着をつけることができる。その意味で、「王様」と「公爵」が法廷に姿を現したことで、「公爵」の計画によるジム救出が可能となったところで、閉じる方法がひとつあり、いまひとつは、探偵トムが「王様」と「公爵」を真犯人であると証明することにより、一挙に事件の解決とジムの釈放、さらには、トムには栄光があたえられるという探偵小説としての終わり方があったはずである。

そのどちらもマーク・トウェインは採用していない。すでに見てきたように、トムは、この作品では歴史を形成する動因とプロヴィデンスの導きとの関連に関心をもっている。不可思議な計り知ることのできない謎に満ちたプロヴィデンスへのマーク・トウェインの関心が、この作品を未完とし、むしろ『ミステリアス・ストレンジャー』の執筆へと向かわせたといえよう。

参考文献

- Beer, John. *Providence and Love: Studies in Wordsworth, Channing, Myers, George Eliot, and Ruskin*. Oxford: Clarendon P, 1998.
- Blair, Walter, ed. *Mark Twain's Hannibal, Huck & Tom*. Berkeley: U of California P, 1969.
- Delbanco, Andrew. *The Death of Satan: How Americans Have Lost the Sense of Evil*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1995.
- Geismar, Maxwell. *Mark Twain: An American Prophet*. New York: McGraw-Hill Book Company, 1970.
- Hartman, James D. *Providence and the Birth of American Literature*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1999.
- Malmgren, Carl D. *Anatomy of Murder: Mystery, Detective, and Crime*. Bowling Green: Bowling Green State U Popular P, 2001.
- Mason, Matthew. *Slavery and Politics in the Early American Republic*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2006.
- Miller, Perry. *The New England Mind: The Seventeenth Century*. Cambridge: Harvard UP, 1982.

- Neidar, Charles, ed. *The Autobiography of Mark Twain*. New York: Perennial Classics, 1990.
- _____. *The Complete Short Stories of Mark Twain*. New York: Bantam Books, 1983.
- Nicholas, Guyatt. *Providence and the Invention of the United States, 1607-1876*. New York: Cambridge UP, 2007.
- Reader's Digest. *Family Encyclopedia of American History*. Pleasantville: The Reader's Digest Association, 1975.
- Squires, John T. *The plan of God in Luke-Acts*. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- Tuckey, John S, ed. *Mark Twain's Fables of Man*. Berkeley: U of California P, 1971.
- Twain, Mark. *The Adventures of Huckleberry Finn*. Baltimore: Penguin Books, 1971.
- Vargish, Thomas. *The Providential Aesthetic in Victorian Fiction*. Charlottesville: UP of Virginia, 1985.
- Wexler, Alan. *Atlas of Westward Expansion*. New York: Facts On File, 1995.